

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	妙一記念館本『仮名書き法華経』における唇内入声韻尾の表記と促音化：右傍振り仮名の調査から
Author(s)	黒木, 裕梨香
Citation	論叢 国語教育学, 18 : 14 - 23
Issue Date	2022-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53676
URL	https://doi.org/10.15027/53676
Right	
Relation	



妙一記念館本『仮名書き法華経』における唇内入声韻尾の表記と促音化

―右傍振り仮名の調査から―

黒木 裕 梨香

一 問題の所在と本稿の目的

本稿は、妙一記念館本『仮名書き法華経』（以下「妙一本」）における、唇内入声字¹の振り仮名の字音仮名表記について調査し、その実態を明らかにするものである。

「妙一本」は本文の左右に傍書が存在し、右傍は主に字音が記入されている。唇内入声字の入声韻尾は「―ふ」、²「―う」、³「―つ」、⁴「―ゆ」と書かれる場合、また入声韻尾を書かない場合がある。以下、書かれない場合を無表記と呼ぶ。これらの表記の揺れについては沼本（一九九七）²によって指摘されているもの、それは全用例に基づいた指摘ではない。

そこで、本稿では「妙一本」におけるすべての唇内入声韻尾の右傍振り仮名の字音仮名表記を調査することにより、沼本（一九九七）の実証及び不足の指摘、また「妙一本」における唇内入声字の促音の表記や促音化の程度について検討することを目的とする。

二 先行研究

「妙一本」の唇内入声韻尾の表記について、沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究―體系と表記をめぐって―』がすでに指摘を行

っている。

沼本（一九九七）は、唇内入声韻尾を「ふ」と表記する比率が高い巻と低い巻があるものの、全体的には「う」というハ行転呼音の形が出現するとし、「妙一本」書写年代が鎌倉初〜中期であるという時代的側面、一般子女の斉唱用であるという和文脈・日常語的な側面から、当然の実態であると述べている。

さらに、沼本（一九九七）は漢文脈で生じたとされる唇内入声の促音化の例を示し、ハ行転呼音形と促音形がどちらも現れる語の存在から、「妙一本」内で和文脈と漢文脈という位相差による語形の揺れがあるとしている。

入声韻尾の促音表記については、沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』³が調査を行っている。

沼本（一九八二）では、入声韻尾の促音表記について、字音直読資料の調査を行っている。促音表示法には、①仮名「ツ」「チ」による方法、②準仮名「レ」による方法、③声点―フ入声⁴による方法、④声点―キフ・ユル―による方法、⑤合符による方法があるとす。

また、沼本（一九八二）は法華経吳音直読資料において、入声とフ入声の加点から、唇内入声字が熟語の下位に立って読まれる場合には常

にフ入声を加えられること、唇内入声字が熟語の上位に立って読まれる場合、フ入声を加えられるのは下接字が有声音字の場合であることを指摘している。

三 研究方法

本稿の研究対象は、本文の右傍に振り仮名による字音仮名表記がある唇内入声字とする。左傍振り仮名の多くは訓、熟字訓、注釈であるため、本研究では対象外とした。

唇内入声字の検索には、中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経索引篇』(以下『索引篇』)を用いる。唇内入声字の検索は、本稿の筆者が索引項目から音形を手掛かりとして行った。入声字の認定には『広韻』⁵⁾を用いる。

「妙一本」内には、『広韻』で平声、上声、去声とされる字に、入声加點が行われている字が存在する。特に唇内入声字について、沼本(一九九三)⁶⁾では、「一う」韻尾をもつ字が、唇内入声字「一ふ」のハ行転呼音形である「一う」と混乱したため、入声の誤加點が行われた、と説明がある。以上の指摘、また本稿は右傍振り仮名の字音仮名表記に注目するという点から、用例収集においては「妙一本」内での声点の加點状況を考慮しない。

また『索引篇』内で、「てんほう【法輪】五〇三・四」のように誤写、誤読と認定されているものも除外した。なお、語の所在を示す際は、五〇三・四のように示し、漢数字は中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経 影印篇』(以下『影印篇』)の頁を指し、算用数字は行数を指す。

四 研究結果

「妙一本」内で字音仮名表記が行われている唇内入声字は二五字

である。左に示す。なお字体は全て現行のものに改めた。

葉、合、急、給、狭、劫、怯、業、巾、雜、十、執、集、習、濕、
妾、接、瘡、撰、塔、氈、衲、入、法、獵

(一) 唇内入声韻尾の仮名表記

唇内入声韻尾の表記を表一、その割合を表二に示す。表内の空白セルは用例零を示す。

なお、「一う」⁷⁾、「一ゆ」表記のどちらにも属すとして、「習」⁸⁾は表から除外した。

【表一 右傍振り仮名における 唇内入声韻尾の字音表記】

	法	劫	十	塔	合	習	葉	入	業	帀	給	雑	執
一う	637	159	48	69	6	15	15	14	13	12	10	6	2
一ふ	103	8	8		1	2							4
無表記	99		17		10								
一つ	16				3							1	
一ゆ													
計	855	167	73	69	20	17	15	14	13	12	10	7	6

	集	急	接	怯	撰	獵	狹	湿	妾	瘖	氈	納	計
一う	1	4	2	3	2	2	1		1	1	1	1	1025
一ふ	1		1										128
無表記													126
一つ			1					1					22
一ゆ	2												2
計	4	4	4	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1303

【表二 右傍振り仮名における 唇内入声韻尾の字音表記の割合】

	法	劫	十	塔	合	習	葉	入	業	帀	給	雑	執
一う	74.5%	95.2%	65.8%	100.0%	30.0%	88.2%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	85.7%	33.3%
一ふ	12.0%	4.8%	11.0%		5.0%	11.8%							66.7%
無表記	11.6%		23.3%		50.0%								
一つ	1.9%				15.0%							14.3%	
一ゆ													
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

	集	急	接	怯	撰	獵	狹	湿	妾	瘖	氈	納	計
一う	25.0%	100.0%	50.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	78.7%
一ふ	25.0%		25.0%										9.8%
無表記													9.7%
一つ			25.0%					100.0%					1.7%
一ゆ	50.0%												0.2%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表一、二を概観すると、全用例中七八・七%が「一う」表記となつており、沼本が指摘するように、ハ行転呼が全体的に起きていているといえる。

表一、二で掲出した字がどの巻に現れるかについて、表三、四に示す。

【表三 巻ごとの分布】

	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	計
一う	180	101	203	147	112	117	94	71	1025
一ふ		53	2	7	50	3	2	11	128
無表記	14	4	5	33	21	12	20	17	126
一つ		1			3	9		9	22
一ゆ				2					2
計	194	159	210	189	186	141	116	108	1303

【表四 巻ごとの分布割合】

	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	計
一う	92.8%	63.5%	96.7%	77.8%	60.2%	83.0%	81.0%	65.7%	78.7%
一ふ		33.3%	1.0%	3.7%	26.9%	2.1%	1.7%	10.2%	9.8%
無表記	7.2%	2.5%	2.4%	17.5%	11.3%	8.5%	17.2%	15.7%	9.7%
一つ		0.6%			1.6%	6.4%		8.3%	1.7%
一ゆ				1.1%					0.2%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表四から、巻二、巻五は「一ふ」表記が約三〇%あり、巻一には

「一ふ」表記がないことが分かる。沼本の指摘のように、「一ふ」表記が行われる比率が高い巻と低い巻があることが分かった⁷⁾。

また、沼本(一九九七)は促音化した語は八語としている。左に沼本が示した語の全用例を示す。示し方は沼本(一九九七)に倣い、用例の下は『影印篇』の頁数を示す。

- (1) 合掌(かしやう) 13 28 48 …… 合掌(かっしやう) 289 1052 ……
- (2) 法華経(ほくゑきやう) 66 70 …… 法華経(ほくゑきやう) 987 997 ……
- 法華(ほくゑ) 643 649 …… 法華(ほくゑ) 1008
- 法華三昧(ほけさんまい) 1184
- (3) 法師(ほし) 66 631 762 …… 法師(ほつし) 1265
- (4) 十方(しほう) 118 179 737 ……
- (5) 十劫(しこう) 535
- (6) 雑花(ざっか) 736
- (7) 法身(ほっしん) 749 749
- (8) 湿生(しつじやう) 991

以上の沼本の調査において、いくつか指摘が行われていない用例がある。

- ・「無漏法性」(二〇五八六)の用例が指摘されていないこと
- ・「法師」(七一四)の用例が指摘されていないこと
- ・「十方」(八二五、一四九一)の用例が指摘されていないこと

・「法華三昧」は「ほけさんまい」(一一八四)と「ほくゑさんまい」(一二二五五、一二九七五)の二つの字音仮名表記例があり、「ほけさんまい」のみ指摘し、「ほくゑさんまい」は指摘されていないこと

以上の四点から、沼本の調査には漏れがあることが確認される。また熟語ではないが促音化が起きている「接」についての言及もない。「妙一本」内で「接」は単独で現れる。「接」には右傍振り仮名内で活用語尾「し」が下接し、「接」となる。「接」には「せうし」「せふし」「せつし」の字音仮名表記があるものの、沼本の指摘はない。

(二) 促音表記「ーつ」、無表記について

唇内入声韻尾の表記のうち、促音化が起きていると予想されるのは「ーつ」、無表記である。前項で確認した用例のうち、「ーつ」、無表記が存在するのは、合、雑、十、湿、接、法の六字である。以上六字が用いられている用例が促音化する環境にあるか、調査を行う。促音化は、下接字の頭子音が無声の場合に起こるため、下接字を調査した。

「妙一本」内で「ーつ」、無表記が行われている、合、雑、十、湿、接、法の用例を左に示す。該当字に傍線を付した。なお熟語の認定は『索引篇』に依った。複数の用例があるものについては、各用例の下部に○で用例数を示す。また、各用例の所在は資料として本稿末に示す。

「ーつ」 合掌(2)、雑花、臨生、接し、法華(10)、法華経、妙法華経、法師、無漏法性、法身

無表記

合掌(2)、安禪合掌、一心合掌、恭敬合掌(3)、歡喜合掌(2)、合掌供敬、什劫、什方(12)、現在什方、什方世界(2)、法華(10)、法華経(63)、妙法華経(12)、法華三昧(2)、法華三昧、法華経藏、法師(6)、妙光法師(2)、法師功德品、法師功德品

このうち、声点が加添されているものは、「合掌」、「湿生」、「十方」、「法師功德品」の各一例、計四例であり、「湿生」、「法師功德品」は入声点、「合掌」、「十方」は入声濁点であった。

以上、「ーつ」、無表記の表記が行われている全例では、下接字は無声子音となっており、一部の例には入声点が加添されていた。したがって、「ーつ」、無表記は促音化していると考えられる。

つづいて、促音化している六字の「ーう」、「ーふ」表記について検討を行う。

上述したように、沼本(二九八二)では、法華経吳音直読資料において、入声とフ入声の加添から、唇内入声字が熟語の下位に立って読まれる場合には常にフ入声を加えられること、唇内入声字が熟語の上位に立って読まれる場合、フ入声を加えられるのは下接字が有声子音の場合であることを指摘している。

以上の沼本の指摘から、促音化している六字の「ーう」、「ーふ」表記の下接字の調査を行う。該当字が熟字の上字である場合、下接する字が有声子音、無声子音のどちらであるかを調査した。結果を表五、

六に示す。

【表五 該当字の下字の有声/無声】

	合	雑	十	湿	接	法	計
有声子音		1	28			90	119
無声子音	5	4	26		1	2	76
計	5	5	54		1	2	166

【表六 該当字の下字の有声/無声の割合】

	合	雑	十	湿	接	法	計
有声子音		20.0%	51.9%			54.2%	51.1%
無声子音	100.0%	80.0%	48.1%	100.0%	100.0%	45.8%	48.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表五から、十、法については、有声子音と無声子音はほぼ拮抗しているものの、わずかに有声子音が上回ることが分かった。雑については、「雑穢」の一例のみ下接する字が有声子音であった。合、湿、接については、「一う」、「一ふ」表記であっても、下接する字は無声子音であることが分かった。

つづいて、促音化する六字が含まれる熟字を分解し、熟字としての最小単位で確認する。例えば「第十三」であれば「第十十三」として十は熟字の上字、「三十二」であれば「三十二」として熟字の下字

とする。「妙一本」内で「妙法緊那羅王」のようにいくつかの熟字が複合して一つとなる場合がある。複合した熟字の場合、下接する頭子音が無声であっても最小単位の熟字の下字であるという意識があれば促音化しないと考えたためである。該当字が熟字の上字になる場合、下接する頭子音の調査結果を表七、八に示す。

【表七 最小単位における該当字の下字の有声/無声】

	合	雑	十	湿	接	法	計
有声子音		1	3			21	25
無声子音	5	4	2	1	2	9	23
計	5	5	5	1	2	30	48

【表八 最小単位における該当字の下字の有声/無声の割合】

	合	雑	十	湿	接	法	計
有声子音		20.0%	60.0%			70.0%	52.1%
無声子音	100.0%	80.0%	40.0%	100.0%	100.0%	30.0%	47.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

以上すべての調査から分かった点として、「一つ」、無表記は促音化環境にある場合のみに現れ、「一う」、「一ふ」表記は下接する字の頭子音が有声、無声に関わらず現れる点がある。ここから、「一つ」、無表記は促音であり、「一う」、「一ふ」は促音化していない可能性が考えられる。この可能性について検討するため、「一う」、「一ふ」表記、また「一つ」、無表記のどちらでも字音仮名表記が行われる語につい

て調査を行う。

「ーう」、「ーふ」表記、また「ーつ」、無表記のどちらでも字音仮名表記が行われる語について、用例を調査した結果を左に示す。なお、今回は同一語、もしくは唇内入声字の上下が同一字である場合に唇内入声韻尾の字音仮名表記が揺れる語と設定し、「合掌供敬」は「合掌」にするなど、語をまとめた。該当字に傍線を引き、用例の下にその表記を示す。

「ーう」と「ーふ」表記で揺れるもの

劫(こう／こふ)、劫千万億劫(こう／こふ)、二十中劫(こう／こふ)、

無量劫(こう／こふ)、無量阿僧祇劫(こう／こふ)、

修習(しゅう／しふ／しゆう)、十力(しゅう／しふ)、

三十二相(しゅう／じゅう／しふ)、十八不共(じゅう／しふ)、

法(ほう／ほふ)、経法(ほう／ぼう／ぼふ)、四法(ほう／ほふ)、

諸法(ほう／ほふ)、小法(ほう／ぼう／ほふ)、正法(ほう／ぼう／ほふ)、

像法(ほう／ぼう／ほふ)、道法(ほう／ほふ)、妙法(ほう／ほふ)、

法王(ほう／ほふ)、法音(ほう／ほふ)、法座(ほう／ほふ)、

法輪(ほう／ほふ)

「ーう」、「ーふ」と「ーつ」、無表記で揺れるもの

合掌(かふ／かつ／がつ／か)、法師(ほう／ほつ／ほ)、

法性(ほふ)／法生(ほう／ほつ)、法華経(ほう／ほつ／ほ)

「ーう」、「ーふ」表記の揺れは「劫」「法」など唇内入声字が単独で現れる場合にも起こることが分かった。ここから、唇内入声字が熟字の下字の場合、また唇内入声字に下接する頭子音が有声子音の場合

には、「ーう」表記は「ーふ」表記のハ行転呼音と考えられ、「ーう」、「ーふ」表記は同じものであると考えられる。

促音化が起きていると考えられる「ーつ」、無表記が行われる語にも「ーう」表記が存する。「法師」「法性(生)」「法華」については、『日本国語大辞典』においても「日本書紀」「色葉字類抄」「太平記」などの用例から、「ーう」表記と促音の揺れが認められる語である。「合掌」については『日本国語大辞典』では促音化している「がっしょう」のみが掲出されており、促音環境にある「ーふ」表記は無声化し、促音化していた可能性が考えられる。

以上から分かったこととして、

- ・「劫」「法」の単独の用例から、促音環境にない「ーう」、「ーふ」表記は促音化していない
- ・促音環境にある唇内入声字でも、「ーう」表記であれば促音化していない
- ・促音環境にある唇内入声字で、「ーふ」表記が行われる場合、無声化し、促音化している可能性が考えられる
- ・の三点がある。

「妙一本」内では、唇内入声字に無声子音が下接する場合でも必ず促音化するとは言えず、沼本(一九八二)で調査されている法華経吳音直読資料とは異なる結果となった。また沼本(一九九七)では指摘が行われなかった促音環境にある「ーふ」表記の促音化の可能性を指摘した。

五 成果

本稿では、「妙一本」における唇内入声字の字音仮名表記の実態を

法華經藏（ほくろぎやうさう）	六五八三
法華三昧（ほくろさんまい）	一一一五五、一二九七五
法華三昧（ほけさんまい）	一一八四四
法師（ほし）	七六二二、七九八一、一〇二四 二、一二六六、一二七五二、一 二八二一
妙光法師（めうくわうほし）	六六四、七一四
法師功德品（ほしくとくほん）	六三一五
法師功德品（ほしくどくほん）	一〇一二三
法身（ほつしん）	七四九二、七四九三
無漏法性（むろほつしやう）	一〇四四五

注

- 中国字音の韻尾が k・t・p で終わるもののうち、p で終わるものが唇内入声字である。
- 沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究―體系と表記をめぐって―』六五七―六六九頁
- 沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』一〇八三―一一五九頁
- 注3、同著三六五―三八八頁において、フ入声の音価の指摘がある。法華経・四種相違疏・成唯識論における唇内入声字は、無声子音の字は下接する場合に規則的に促音化しており、その促音化したものを入声、非促音化のものをフ入声として表示した、と述べる。
- 中国の韻書。「大宋重修広韻」のこと。北宋の陳彭年（ちんほうねん）、丘雍（きゆうよう）などの奉勅撰。1008年完成。「切韻」「唐韻」の音系と反切を継承し、平声（上、下）、上声、去声、入声の全5巻から成る。2万6194字を収め、平・上・去・入の206韻に分かつ。古代の字音を知るうえで極めて重要なものとされる。（『デジタル大辞泉』）

本稿では「Web 韻圖（廣韻檢索）」を用いる。

6 沼本克明（一九九三）「鎌倉時代の二字漢語アクセントの構造―妙一記念館本仮名書き法華経による―」『訓点語と訓点資料』九〇巻一六一―一七三頁

7 注6同著、六六七頁注21において沼本は、巻二、八が「一ふ」表記が多いとし、その理由を、振り仮名の加点が異なる可能性とする。本文の書写者については、『影印篇』下巻末にある中田による略解説で一、三、四、五、八はほぼ同一筆、二、六、七はほぼ異筆とある。

8 『日本国語大辞典』にはそれぞれ左のようにある。該当部に傍線を付した。

「法師（ほうし）」については、「(一)僧侶。出家。*日本書紀(720)崇峻元年是歲(圖書寮本訓)「百済の国使并せて僧(ホウシ)惠・令斤・惠等を遣して仏の舍利を献る」*宇津保物語(970〜999頃)「あて宮「少将、いふばかりなくなきまどひて、かへりてすなはちほうしになりにけり」*徒然草(131頃)五二「仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ」*説経節・説経苜蓿(163)下「おやまへをのぼりなされてに、はうし一人ちかづけて」とある。

「法師（ほつし）」については「ほうし(法師)」に同じ。*熱田本平家物語〔13C前〕四・三位入道鶴射事「大衆已下の法師(ほつし)輩(ばら)」*ロドリゲス日本大文典(1604〜08)「*kon* (ホツシ)三)ライテワイザシラスデサウト」*説経節・説経苜蓿(163)上「とんせいしやの、すゑを」とげさせてたまはれと、ほつしばかりとふしをがみ」とある。

「法性(ほうしやう)」については、掲出された用例が「妙一本」のみである。しかし、類語である「法性寺」において、「ほうしやうじ」「ほうさうじ」がある。「法性寺(ほうしやうじ)」は「ほつしやうじ(法性寺)」に同じ。*太平記〔14C後〕八・三月十二日合戦事「竹田川原を上りて法

性寺(ホウシヤウジ)大路(へ落るもあり) *天草本平家物語(159) 四・二八
「ソノ セイサンビヤク ヨキデ Fosojino (ホウシヤウジノ) ヒトツバシエ
ヲシヨセタレバ」, 「法性寺(ほうさうじ)」は「ほっしょうじ(法性寺)」
に同じ。*源氏物語(101〜14頃) 東屋「河原過ぎ、ほうさうじのわたり、
おはしますに」がある。

「法華(ほうけ)」については、「ほっけ(法華)【一】」に同じ。*色葉字類
抄(117〜81)「法華 寺家部 ホフク」とある。

「法華(ほっけ)」については、「一」「ほっけしゅう(法華宗(一))」の略。

*類聚国史・一四七・撰書・延暦二年(803)三月己未「法師生年廿五、
被充入唐留学、学唯識、法華(両宗) *尊号真像銘文(1255) 末「所謂真言・
止観之行といふは、真言は密教なり。止観は法華(なり)」とある。

参考文献

- ・沼本克明(一九八二)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- ・中田祝夫編(一九八八)『妙一記念館本仮名書き法華経 影印篇』上
下 霊友会
- ・中田祝夫編(一九九〇)『妙一記念館本仮名書き法華経 索引篇』霊
友会
- ・沼本克明(一九九三)「鎌倉時代の二字漢語アクセントの構造―妙
一記念館本仮名書き法華経による―」『訓点語と訓点資料』九〇巻
一六一―一七三頁 汲古書院
- ・沼本克明(一九九七)『日本漢字音の歴史的研究―體系と表記をめ
ぐって―』汲古書院
- ・「Web韻圖〜廣韻検索〜」
(<http://suzukish.s252.xrea.com/search/inkyo/index.php>)

(最終閲覧日:二〇二一年二月一日)

『デジタル大辞泉』小学館

ジャパンプナレッジ(<https://japanknowledge.com/library/>)

(最終閲覧日:二〇二一年二月一日)

『日本国語大辞典』第二版 小学館

ジャパンプナレッジ(<https://japanknowledge.com/library/>)

(最終閲覧日:二〇二二年六月一日)

(広島大学大学院博士課程前期二年)